

分担課題:本邦における不育症患者の頻度調査

研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者 鈴木貞夫 名古屋市立大学公衆衛生学教授
研究協力者 尾崎康彦 名古屋市立大学大学院医学研究科准教授
研究協力者 北折珠央 名古屋市立大学大学院医学研究科助教

研究要旨

本邦において習慣流産は 0.9%、不育症は 4.2%の頻度であり、妊娠経験者の 38%が流産を経験していることが明らかとなった。不育症患者数は(2 回以上連続流産として、既往も含めて)140 万人、年間約 3 万組が発症していると推定する。

流産、不育症経験者は流産経験のない女性よりも離婚率が高いことが明らかになった。流産はありふれた妊娠合併症であり、不育症患者の 9 割が生涯出産可能なことを国民に啓発する必要がある。

A. 研究目的

不育症は、妊娠はするけれど流産・死産によって生児を得られない場合をいい、3回以上連続する流産を習慣流産という。習慣流産の頻度は欧米の古い文献で約1%とされているが、本邦での頻度はまったく調査がされていない。不育症の実態を知る上で頻度の調査は極めて重要である。

B. 研究方法

愛知県岡崎市において生活習慣と遺伝子多型に関する文部省科学研究が名古屋市立大学公衆衛生学講座(研究代表者:鈴木貞夫)によって実施中である。健康診断を受ける 35 歳から 79 歳の一般市民に対する調査であり、問診表に妊娠歴を加えることで頻度が計算できる。本研究は名古屋市立大学倫理委員会の承認を得た。

C. 研究結果

2010 年 6 月の時点でコホート数:6086 名、女性:2733 名
妊娠あり:2503 名(平均 2.96 回)
流産あり:953 名(38.1%)
2 回以上連続流産あり:105 名
3 回以上連続流産あり:22 名
したがって、習慣流産は 0.88%、不育症は 4.2%、妊娠経験者の 38%が流産を経験していた。

BMI は流産、不育症ともに影響を与えなかった。20

歳の月経不順が強い人ほど不育症頻度が増加した($p=0.04$)。

離婚経験は流産なしの 3.0%に対し、流産経験者 5.1%、不育症 8.8%であり、流産が夫婦関係に深刻な影響を及ぼしていることが明らかになった($p=0.015, 0.016$)。

しかし、現在の健康感は不育症 74.4(14.2)、流産経験者 75.1(14.8)、流産なし 75.7(13.3)であり、流産と関係がなかった。また、現在の幸福感は不育症 78.1(14.7)、流産経験者 79.7(14.9)、流産なし 79.4(14.6)であり、流産と関係がなかった。

不育症経験者の 95.2%(100/105)が出産し、89.5%(94/105)が授乳していることが明らかになった。

D. 考察

2007 年人口統計から 35—79 歳女性の数は 3681 万人であり、2 回以上連続流産した女性は $\times 105/2733=141$ 万人

1年あたりの発症数はこれを 45 年で割って 31,427 組/毎年という計算が成り立つ。ただし 45 年間で出産数は減少し、妊娠女性の高齢化により流産率は増加しているため補正は必要である。

不育症(2 回以上連続流産として)患者数 140 万人、年間約 3 万組の発症数と推定できる。

欧米では BMI が流産、不育症と関係するという報告が散見されるが、本邦での関係は明らかではなかった。日本人は Caucasian ほど肥満が著名ではなく、

やせの問題もあり、単純な解析では明確にすることが出来ないと考えられた。

黄体機能不全は名古屋市立大学でも反復流産患者の 23%にみられることが判っている。黄体期中期の progesteron 値によってその後の流産を予知することはできなかった。また、progestron 投与が不育症患者の生児獲得率を改善するというデータもない。しかし、20 歳の月経不順が強いほど不育症頻度が多いということは、内分泌の関与は明らかであり、多のう胞性卵巣症候群、黄体機能不全に関する今後の検討が必要と考えられた。

流産、不育症は離婚頻度を増加させることが明らかになった。流産は男性より女性の精神的影響度の高い疾患であり、夫婦関係に影響を及ぼすという報告は多いが、離婚率も上昇させるほど深刻なものであるなら、流産が極めてありふれた妊娠合併症であり、その後の出産が十分できることを国民に啓発することが重要と考えられた。

不育症経験者の少なくとも 89.5%が生児を得ていることが明らかになった。本研究では死産を出産に含めて回答している者もいると推定されるため、95.2%の出産の中には生児を得ていないものがあるかもしれないが、母乳を与えた経験者が 89.5%存在することは少なくともこれだけは生児を得ていると言える。「子宮奇形研究」において不育症患者の 85.5%が生児獲得していることを報告した。奇形研究では流産後に通院を辞めた患者を「失敗」としているため、85.5%にとどまったが、岡崎コホート研究では生涯出産は不育症患者でも少なくとも約 9 割が可能であることを示した。

鈴木貞夫氏は問診表のなかに人工妊娠中絶術について記載したくないとしてこれを加えなかった。そのため、流産の中に人工流産が入っている可能性を指摘している。しかし、日本語として「流産」との質問に対し、「中絶」を加えて考えることは日本人女性ではほとんどないと推測する。

E. 結論

本邦において習慣流産は 0.9%、不育症は 4.2%の頻度であり、妊娠経験者の 38%が流産を経験していることが明らかとなった。

F. 研究発表

1. 論文発表
執筆中

2. 学会発表

第 63 回日本産科婦人科学会発表予定